

東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（十二）

— 戯作者・操觚者・新聞社の蔵書印 —

中善寺 慎

既刊連載目次

- | | |
|---------------------------|--------|
| 一 朝鮮本に押捺された朝鮮の蔵書家の蔵書印 | 書報 35号 |
| 二 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（上） | 書報 36号 |
| 三 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（下） | 書報 37号 |
| 四 国学者の蔵書印（上） | 書報 38号 |
| 五 国学者の蔵書印（下） | 書報 39号 |
| 六 漢学者・漢詩人の蔵書印 | 書報 40号 |
| 七 学校・教育機関の蔵書印 | 書報 41号 |
| 八 医家・本草家の蔵書印 | 書報 42号 |

- 九 大名・藩主とその家の蔵書印 書報43号
 十 幕臣・藩士の蔵書印 書報44号

凡 例

- ・ 印影は縮尺任意の単色写真である。
- ・ 印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。
- ・ 複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に*印を付した。
- ・ 資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。
- ・ 蔵書家の伝記などは主として次の資料に依った。
 - 市古貞次「ほか」編『国書人名辞典』
 - 井上宗雄「ほか」編『日本古典籍書誌学辞典』
 - 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』
 - 国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』
 - 藤村作編『日本文学大辞典』
- ・ 配列は、印記所有者のよみの五十音順とした。



饗庭篁村（一八五五—一九二二）

明治時代の小説家・劇評家・新聞記者。安政二年（一八五五）江戸下谷竜泉寺の質屋に与之吉の第六子として生まれる。名は与三郎。号は篁村、竹の屋主人、竜泉居士など。生後間もなく安政大地震で生母を失い竹村氏に里子として出された。

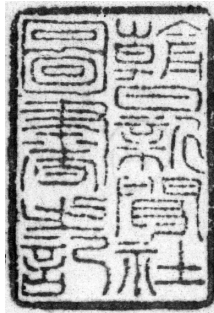
明治七年（一八七四）読売新聞社に入社し校正係となる。高島藍泉に認められ編集記者に抜擢され、根岸派の領袖として文才を謳われる。明治二十二年（一八八九）東京朝日新聞社に移り、小説・劇評・紀行文に独自の妙筆を揮う。江戸文学の造詣が深くその種の蔵書に富んだ。旧蔵の馬琴自筆稿本類は早稲田大学図書館に、浄瑠璃本は大阪府立中之島図書館に現存する。大正十一年（一九二二）没。墓は東京都豊島区駒込の染井墓地にある。著書『むら竹』『雀躍』『竹の屋劇評集』など。

「饗庭文庫」（24）

『正本製』（三―F―a―ち―ア―三）

朝日新聞社

日本における代表的な新聞社の一つ。明治十二年（一八七九）大阪江戸堀南通で創刊された。当初は小説と通俗記事を主体とした小新聞であった。明治二十一年（一八八八）『めざまし新聞』を買収して『東京朝日新聞』とし東京進出を果たす（大阪の朝日新聞は翌年『大阪朝日新聞』と改称）。半世紀の東西朝日時代を経て、昭和十五年（一九四〇）大阪朝日と東京朝日の題号を統一し『朝日新聞』とした。新聞作成に必要な図書類の保管整理を担当する部門は、明治二十六年（一八九三）編集課内に図書掛が置かれることにより始まる。明治四十四年（一九一〇）ロンドンタイムスに範をとった索引部が発足するにあたり図書掛を吸収、ついで調査部に名称を改めている。昭和四十三年（一九六八）調査部収集の資料一万余千冊が大阪府立中之島図書館に寄贈され、「朝日新聞」文庫と名付けられた。この文庫は、近世の文芸書、中国・日本の地誌、昭和前期の中国・台湾・朝鮮関係の資料が充実している。



「朝日新聞社図書之記」(40)『満洲国官制便覧』(五三二四)



阿部充家（一八六二—一九三六）

明治大正時代の新聞人。文久二年（一八六二）肥後国熊本に生まれる。本姓は神山氏。号は無仏。池辺吉十郎の塾に学び、同人社に英語を修める。鹿児島の小学校の教員を経て徳富父子の大江塾で教鞭を執る。明治二十四年（一八九一）国民新聞社に入る。新聞記者として長い経歴を持ちながらほとんど新聞記事を書かなかったと言われる。編集局長たること二回、明治四十四年（一九一）副社長に就任。大正四年（一九一五）より三年間京城日報の社長を兼ねた。朝鮮事情に精通し、寺内正毅・斎藤実両朝鮮総督に助言を行なう。大正十五年（一九二六）東京に中央朝鮮協会を創立、自ら理事としてその基礎の確立に心血を注ぎ、日本と朝鮮との融和に努めた。のち、国民新聞社の顧問となり徳富蘇峰社長の退社と共に辞す。昭和十一年（一九三六）没。墓は鎌倉市の東慶寺にある。著書は『無仏存稿』。昭和十一年一月の『京城日報』に、中村健太郎「阿部無仏翁を偲ぶ」、中島司「無仏翁婦幽録」が掲載されている。

〔阿部充家〕（30）

〔阿部蔵書〕（22）

〔无仏〕（29）

〔无仏〕（21）

『増刊校正王状元分類東坡先生詩』（VII-四-二七五）

『増刊校正王状元分類東坡先生詩』（VII-四-二七五）

『増刊校正王状元分類東坡先生詩』（VII-四-二七五）

『艸山集』（VII-四-B-一四二）

『義経記』（VII-二-F-a-一五）

* 『艸山集』（VII-四-B-一四二）



稲田政吉(一八五三—一九一六)

明治時代の書店主。政治家。嘉永六年(一八五三)書肆山城屋に二代目として生まれる。号は福堂、愛国。日本橋通二丁目の書肆山城屋佐兵衛の分家である父初代政吉は、弘化年間(一八四四—一八四八)南伝馬町に学而堂山城屋を開業。二代目政吉は、明治初年に銀座三丁目に移転を果たし奎章閣山城屋を称し、成島柳北「柳橋新誌」等数十種の出版を手がける。学者や政治家とも広く交際があり、明治十四年(一八八二)には社長西園寺公望・主筆中江兆民らとともに「東洋自由新聞」を創刊し、社主を務めた。以後は政治家の道を歩み、京橋区会議長を経て、東京府会議員、東京市議會議員に選出、明治二十七年(一九〇四)衆議院議員に当選。明治三十三年(一九〇〇)摘発の水道鉛管納入をめぐる汚職事件に関係した。東京書籍商組合副頭取なども務める。書肆を廃業するにおよび京橋区月島に移転、以後書籍蒐集に努め、その蔵書は古版本・江戸図等に富み、珍本も多かったという。大正五年(一九一六)の没後に蔵書の一括売立てがあり、遺書は和田維四郎の手を経て岩崎文庫と久原文庫とに収蔵された。昭和十五年(一九四〇)娘の能子が宮武外骨に嫁いでいる。

「江風山月荘」(17) *『七書』(三A1k1) ほか

「稲田福堂図書」(28) *『七書』(三A1k1) ほか
「福堂」(20) *『七書』(三A1k1) ほか
「福堂(小)」(11) *『白雲詩集』(三A1e2六) ほか

「福堂聚英」(13) *『縮林宝訓』(二B1b九〇)
『長祿江戸図』ほか(三H1d1ろ1)

「福堂文庫」(20) *『延宝六年江戸大絵図』(三H1d1ろ1) ほか

烏亭焉馬（一七四三—一八二二）

江戸時代後期の戯作者。寛保三年（一七四三）江戸に生まれる。本姓は中村氏。名は英祝、利貞。通称は和泉屋和助。号は立川焉馬、談洲楼、桃栗山人柿発斎、鑿鉞言墨金、烏亭窓、英祝軒、肝釈坊、塞翁斎、立川舎、朝鮮堂弘慶子、本庄馬助。祖父以来本所相生町に住み、大工棟梁を生業とし足袋木綿商をも兼ねた。幼時より観劇を好み、俳諧・歌舞伎・戯作・狂歌など多方面で才能を発揮した。大田南畝・五代目市川团十郎などと親しく交わり、後援団体三升連を組織した。また、天明六年（一七八六）以後、咄の会を主宰し、江戸落語中興の祖と呼ばれている。門下に式亭三馬、柳亭種彦がいる。文政五年（一八二二）没。墓は江戸本所表町最勝寺（のち江戸川区逆井に移転）。著書に『花江都歌舞伎年代記』『狂言年代記』などがある。



〔烏亭〕（16）

『参考保元物語』（X―五―D―二八）

〔焉馬〕（16）

『参考保元物語』（X―五―D―二八）

鶯亭金升（一八六八—一九五四）

明治大正時代の戯作者・新聞記者。明治元年（一八六八）下総国八木ヶ谷村で旗本長井五右衛門昌信の子として生まれた。本姓は長井氏。名は総太郎・昌安。号は鶯亭金升、竹葉舎。服部波山に入門して書画漢学を学び、さらに塩谷青山についた。川柳・狂歌・俳句に親しみ、梅亭金鶯の知遇を得る。明治十七年（一八八四）団団珍聞の社員となり、鶯亭金升を名乗り戯作者の道を歩む。明治二十五年（一八九二）『日刊改進黨新聞』社員をも兼務し、以後、『万朝報』『中央』『やまと』『読売』『都』『東京毎日』などの新聞社を転々とし新聞記者を続けた。都々逸・狂句・雑排・長唄・常磐津・小唄などにも手を染めた。門弟の多いことでも知られ、左団次・小山内薫は雑俳の弟子であった。昭和二十九年（一九五四）没。墓は東京都品川区東五反田の本立寺。著書に『明治のおもかげ』等がある。住居を移すこと二十回に及び、その際しばしば蔵書を処分したという。

「鶯亭金升蔵書」（36）

『劇場—観頭微鏡』（IX六—B—一〇—一三）





假名垣魯文（一八二九—一八九四）

幕末・明治時代初期の戯作者。文政十二年（一八二九）江戸京橋槍屋町の魚屋佐吉の長男に生まれる。本姓は野崎氏。名は兼吉・庫七・文蔵。諱は能連。号は假名垣魯文・鈍亭・猫々道人・野狐庵・慕々山人など多数。幼い頃よりの本好きで丁稚時代に細木香以の知遇を得、花笠文京に入門して戯作者の地位を得る。明治維新後は『西洋道中膝栗毛』『安愚楽鍋』等を著して話題を呼んだ。明治六年（一八七三）横浜に移住し民情視察員として神奈川県庁に勤務。『横浜毎日新聞』記者を経て、明治八年（一八七五）自ら『假名読新聞』を創刊主宰。以後、小新聞を舞台に戯文・劇評を発表し滑稽本風な文体の記事で特色を表わした。明治十二年（一八七九）『いろは新聞』を創立して主筆、次いで明治十七年（一八八四）『今日新聞』、明治十九年（一八八六）『東京絵入新聞』に関わる。明治二十七年（一八九四）没。墓は東京谷中の永久寺。書画骨董を愛玩し玩仏居士と称した。蔵書は芝居に関するものが多という。

「假名垣魯文蔵」（29）『名家略伝』（X—五—L—e—1—0—四〇）

木崎愛吉（一八六五—一九四四）

明治・大正時代の新聞記者。金石研究家。慶応元年（一八六五）大坂農人橋材木町に長男として生まれる。号は好尚、長松閣主人。五十川訥堂に漢詩文を学び、頼山陽に心酔する。明治二十四年（一八九一）浪花文学会に参加、機関誌『なにはがた』同人となる。東区第一小学校教員を経て、明治二十六年（一八九三）大阪朝日新聞社に入社し、読物欄を始め小説・随筆に活動した。大正三年（一九一四）朝日新聞社を退社し金石学研究に専念。大正十三年（一九二四）『大日本金石史』で帝国学士院賞。晩年は頼山陽、田能村竹田の研究に努めた。昭和十九年（一九四四）没。東京都立中央図書館加賀文庫中に旧蔵の近世漢詩文集が収蔵される。また、毎日新聞社五代目社長本山彦一の蒐集品である「本山コレクション」（関西大学が現蔵）中には、木崎愛吉旧蔵の金石拓本が含まれている。



『好尚堂図書記』（38） 『物くさ太郎』（VII-21F1a-25）

『嶋原記』（VII-21F1b-8）

『戯場楽屋図会』（IX-16-1B1-10-14）

* 『朱舜水先生七十寿』（X-16-1B1-15-100-1）

『水鳥記』（31F1a-13-32）

北川真顔（一七五三—一八二九）

江戸時代後期の狂歌師・戯作者。宝暦三年（一七五三）江戸に生まれる。通称は嘉兵衛。号は鹿都（津）部真顔、紀真顔、狂歌堂、鹿杖山人、四方歌垣、俳諧歌場、万葉亭、好屋翁。数寄屋橋門外で汁粉屋を営む。初めは恋川好町の名で黄表紙に手を染めるが振るわず、狂歌にて頭角を現す。狂歌は、初め元木網に学ぶが、のち大田南畝に師事し寛政八年（一七九六）四方姓を譲られる。狂歌四天王の一人。天明狂歌の第二世代として宿屋飯盛と双壁をなす。俳諧歌を提唱し文政十一年（一八二八）京都の二条家より宗匠号を授けられた。『狂歌数寄屋風呂』『どうれ百首』など編著も多い。文政十二年（一八二九）没。墓は江戸小石川光円寺。晩年には家庭的にも恵まれず、貧窮のうちに没し万巻の書は散逸した。

〔狂哥堂文庫〕（22）

* 〔口遊〕（II—D—10—24）

『先代旧事本紀』（X—5—C—4—2）

『伊曾保物語』（三—A—d—4）

『伊曾保物語』（三—A—d—4）

〔真顔〕（14）



椒芽田楽（生没年不詳）

江戸時代後期の戯作者。生没年不詳。本姓は神谷氏。名は剛甫。号は田楽、田楽庵、椒芽田楽、木芽（亭）田楽、西江（郊）田楽、木下山人、並戸安売、筍羹菜、爰于翁菜。尾張国名古屋西郊の牧野村の医家。和漢の学に通じ、滝沢馬琴の門人として黄表紙・読本等を著した。当初は貸本用の読本の制作を手掛ける。名古屋の戯作者のうちに重要な位置を占め、自作のほか仲間の作品の多くに序・画・賛などを寄せている。寛政から文政（一七八九—一八三〇）の頃に活躍し、石橋庵真醉（一七七四—一八四六）と親交があった。黄表紙『提灯庫闇夜七扮』など。

『椒芽田楽』（27）

『馬ノ塔図絵』（三十一頁）

『長命富貴』（17）

『馬ノ塔図絵』（三十一頁）





幸堂得知（一八四三—一九一三）

明治時代の劇評家。天保十四年（一八四三）江戸下谷東坂町の青物商鹿島屋に生まれる。本姓は高橋氏。名は庄吉のち平兵衛、また利平。号は竹鶯居、劇神仙、東婦坊。祖母・父の影響で幼い頃から芝居に親しむ。また、貸本屋の草双紙から俳諧、川柳と進み、長唄、小唄も嗜む。維新後は三井両替店（後の三井銀行）の店員となり、明治三年（一八七〇）横浜の出張所詰。実直で几帳面な人柄を大番頭鈴木利平に見込まれ養子に入り、出世して各地の支店長を歴任する。この間、職務の傍ら『読売新聞』その他の新聞雑誌に劇評を寄稿していた。その後、明治二十一年（一八八八）に退職して下谷で呉服商を営むが失敗し、東京朝日新聞に客員として入社。幸堂得知の名で小説を担当し、根岸派の文人として滑稽読物に筆を揮った。明治二十八年（一八九五）退社。以後、本の収集に努めた。大正二年（一九一三）没。墓は東京下谷谷中上三崎南町金嶺寺。著書『幸堂滑稽談』などがある。

「幸堂」（14）『むかしうた猿狂言』（VII—二F—c—E—三）

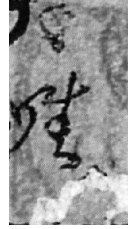
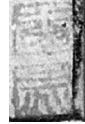
『吉野滝田ふたり山姥』（VII—二F—c—E—三）

『金平竜宮物語』（三F—a—と—イ—一〇（四））

* 『白旗之由来』（三F—a—と—イ—一三（一〇〇））

「来々」（30）* 『紫の一本』（XI—五—C—六七）

『正本製』（三F—a—ち—ア—三）



小寺玉晁（一八〇〇—一八七八）

幕末・明治時代初期の随筆家。名古屋藩陪臣。寛政十二年（一八〇〇）名古屋に生まれる。一時木村姓。名は、初め広治、のち広路（広道）。字は好古。通称は富次郎、九右衛門、第八郎、第八。号は玉晁、古楽園嘉来、連城亭玉晁、続学舎、対硯斎、随筆園、珍文館など多数。名古屋藩の老臣大道寺家の臣小寺広政の養子となる。書道・算術・謡を江上庄右衛門や小川三郎兵衛に、画を森高雅に、狂歌・俳諧を榛園秋津に、香道を蜂谷宗意に、国学を本居内遠に学ぶ。大道寺などの諸家に転々と仕えたが、家貧しく、貸本の筆耕に報酬を得ていた。好事家・雑学者として名高く、小田切春江・笠亭仙果・細野要齋らと好事の会「耽古連」を結成し珍書の収集を競った。明治十一年（一八七八）没。墓は名古屋平和公園安浄寺墓域にある。没後稿本類と蔵書の一部が早稲田大学図書館に入る。著書に『見世物雑志』『東西評林』などがある。併せ捺されている「こく晁」印は子の国晁の蔵印である。

〔玉／晁〕（連印7×2）

『元禄八刊武鑑』（XII—三—D—d—五〇）

『信田』（三—F—a—r—八）

『元禄八刊武鑑』（XII—三—D—d—五〇）

〔玉晁〕（20）

『元禄御役武鑑』（XII—三—D—d—四八）

『元禄八刊武鑑』（XII—三—D—d—五〇）

『信田』（三—F—a—r—八）

（50）



山東京山（一七六九—一八五八）

江戸時代後期の戯作者。明和六年（一七六九）江戸深川の質商伊勢屋伝左衛門の次男に生まれる。岩瀬氏。名は百樹。一時鶉飼助之丞、佐野栄助と称す。字は鉄（鏡）梅。通称は相四郎、利一（市）郎。号は山東京山、京山人、山東庵、涼仙、覧山、鑾山・鉄筆堂、方半居士、八十二翁など。山東京伝の弟。幼時より漢字を修め書画を学ぶ。寛政三年（一七九一）叔母鶉飼氏の養子となり丹波篠山藩主青山侯に仕え、同十一年（一七九九）致仕。篆刻を益田勤斎に学び業とした。文化四年（一八〇七）山東京山の名で『復讐妹背山物語』を出し、以後戯作に携わる。婦女童幼の教訓ものに特色ある作風を示す。天保九年（一八三八）剃髪、涼仙と号す。安政五年（一八五八）没。墓は江戸両国回向院。ほかに考証随筆『歴世女装考』がある。

「山東庵」(34) 『うとふの俤』(VII-21F1cE18)

式亭三馬（一七七六—一八二二）

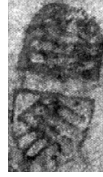
江戸時代後期の戯作者。安永五年（一七七六）江戸浅草田原町の板木師菊地茂兵衛の家に生まれる。姓は菊地。名は太（泰）助（輔）。字は久徳。通称は西宮太助。号は式亭三馬、本町庵、四季山人、哆囉哩楼主人、遊戯堂、遊戯道人、洒落齋、滑稽堂、戯作舎、酔夢閣、三多楼戲家山（主）人、猪牙散人。幼少より戯作を好み、長じて書肆翫月堂堀野屋仁兵衛に奉公し、戯作を志して修業に励んだ。一時は書肆蘭香堂万屋太治右衛門の婿養子となる。寛政六年（一七九四）黄表紙『天道浮世出星操』を処女作とし、合巻、洒落本、滑稽本の作者として活躍。代表作は『浮世風呂』『浮世床』。また、日本橋本町に化粧品・売薬店を経営して産をなす。平賀源内・森島中良を師と仰ぎ、交際家で烏亭焉馬や北川真顔らと親しみ、益亭三友ら多くの門人がいた。文政五年（一八二二）没。墓は江戸深川雲光院寺長源院（関東大震災で焼失のち、目黒区碑文谷の正泉寺へ改葬）。

〔三馬〕（21）

『好色小柴垣』（三F一aはウー九）

〔式亭〕（14）

『好色小柴垣』（三F一aはウー九）



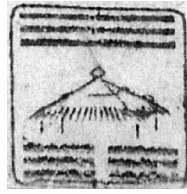
台湾日々新報社

日本の台湾領有時代の代表的な日本字新聞社。本社は台北におかれた。台湾の日本語新聞は明治二十九年創刊の『台湾新聞』と翌三十年創刊の『台湾日報』の二紙があったが、両者の対立が激しくなったため台湾総督府の主導により明治三十一年（一八九八）合併し、守屋善兵衛を社長に『台湾日々新報』として新発足した。以後、総督府の手厚い保護を受けた植民地機構の準広報紙となる。ほかに日本人経営の新聞として『台湾新聞』（一九〇一年創刊の『台中毎日新聞』を一九〇七年改題）、『台湾日報』（一八九九年創刊の『台南新聞』を一九三七年改題）、『東台湾新報』、『高雄新報』、『漢族系の『台湾新民報』の日刊紙があった。『台湾日々新報』も含めた六紙は、昭和十九年（一九四四）用紙不足を理由に統合され『台湾新報』となる。

「台湾日々新報社蔵書印」（31）

『清賦一斑』（XIII-6-B-1-10）





滝沢馬琴（一七六七—一八四八）

江戸時代後期の戯作者。明和四年（一七六七）旗本松平信成の用人を務める滝沢運兵衛興義の五男として江戸深川に生まれる。本姓は源、滝沢氏。名は興邦、のち解。幼名は倉蔵。字は吉浦。通称は左七郎、佐吉、瑣吉、清右衛門、笠翁、篁民。号は曲亭馬琴、著作堂主人、飯台陳人、玄同陳人、大栄山人、蓑笠漁隠、信天翁、魁畜子など多数。幼時より読書を好み独学ながら漢籍和書俳書の類を読み耽り、傍ら浄瑠璃本、戯作をも愛好した。医学を山本宗英に、儒学を亀田鵬斎に、狂歌を石川雅望に学ぶ。寛政二年（一七九〇）山東京伝に入り。その後鳶屋重三郎の番頭代を経て、履物商伊勢屋に婿に入り、飯田町中坂下の家主となる。この間、戯作者として精力的に活動し、読本・黄表紙・合巻など多くの著作をなした。渡辺崋山、木村黙老、殿村篠斎、小津桂窓らと親交があった。屋代弘賢、山崎美成らと耽奇会を起し、奇物・名物を論じ合う。嘉永元年（一八四八）没。墓は江戸小石川深光寺。六千卷に及ぶ膨大な蔵書があったが晩年にその多くを売却した。

〔曲亭文庫〕（57） 『本朝遼史』（X-五-L-e-r-〇二八）

〔乾坤〔草堂〕（絵）〕（24） 『禽鏡』（五-F-I-二）

〔蓑笠隠居〕（24） 『禽鏡』（五-F-I-二）

〔著作堂図書記〕（26） 『本朝遼史』（X-五-L-e-r-〇二八）

〔滝沢文庫〕（37） 『瓊浦偶筆』（X-五-A-一〇〇一）

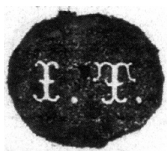
* 『得泰船筆語』（XI-四-一〇〇七）

『禽鏡』（五-F-I-二）

徳富蘇峰（一八六三—一九五七）

明治・大正・昭和時代の新聞人。文久三年（一八六三）肥後国水俣の郷士の長男に生まれる。名は猪一郎。号は蘇峰、鈍研、桐庭、大江逸、玄堂、氷川子など数多い。蘆花徳富健次郎の兄。熊本洋学校、東京英語学校を経て同志社英学校に入學し新島襄の薫陶を受け、明治十三年（一八八〇）同校を中退し帰郷。熊本では自由民権結社相愛社に加盟し政談演説や新聞編集に従事する。明治十九年（一八八六）『将来之日本』を出版して一躍文名を挙げ上京、翌二十年民友社を創立し『国民之友』を発刊する。明治二十三年（一八九〇）に『国民新聞』を創刊し本格的な言論活動に入る。大正期以後は修史事業に志し、『近世日本国民史』の執筆を開始する。大正十二年（一九二三）の関東大震災で新聞社は全焼し、昭和四年（一九二九）には『国民新聞』を手放さざるを得なくなつた。昭和三十三年（一九五七）熱海の晩清草堂に没す。墓は東京府中の多磨霊園。明治三十六年（一九〇三）頃から古典籍の蒐集に開眼。成實堂文庫に集めた七万点を超える和漢書は、昭和十五年（一九四〇）主婦之友社社長石川武美に全て譲渡、お茶の水図書館に現存する。晩年の旧蔵書と関連資料は同志社大学に収蔵される。

『蘇峰愛読』（20）『精選唐宋千家聯珠詩格』（二一B—d—一六）
『TJ』（18）『精選唐宋千家聯珠詩格』（二一B—d—一六）





日布時事社

二十世紀前半のハワイにおける代表的な日本字新聞社。日刊。本社はホノルル市。明治二十八年（一八九五）創刊された『やまと新聞』を前身とするハワイ最古の日本字新聞である。明治三十九年（一九〇六）『日布時事』と改題。主筆兼社長は相賀安太郎（溪芳）。この時期のハワイではほかに、『布哇報知』（一九二二年創刊。のち『ハワイ・ヘラルド』と改題）、『布哇毎日』（一九〇九年創刊の『布哇殖民新聞』を一九一四年改題）、『新日本』、『布哇新報』などが発行されていた。昭和十七年（一九四二）日米開戦のため『ハワイ・タイムス』に改題される。

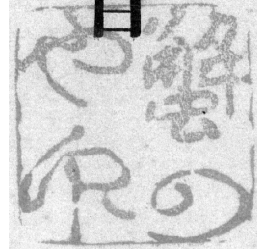
「日布時事所蔵」(50)

『布哇同胞發展回顧誌』(XIII-五C-b-二六)

野崎左文（一八五八—一九三五）

明治大正時代の狂歌師・新聞記者。安政五年（一八五八）高知に生まれる。名は城雄。号は蟹廼屋、蟹垣左文、琴亭文彦、愛蟹漁史、呉園情史など。幼少の頃から小説の類を好む。長崎で英書を学び、明治二年（一八六九）藩費生として上京、大学南校、大阪の開成学校に学ぶ。明治六年（一八七三）鉄道寮の雇員となり、翌年には工部省の技手となる。明治九年（一八七六）仮名垣魯文の門下。『東京公論』『国会』などの新聞記者として活躍する。のち日本鉄道・北海道官設鉄道・九州鉄道などを経て鉄道院副参事となり、晩年は悠々自適の生活を送る。狂歌文献の収集者としても知られ、蔵書の一部が慶応大学図書館狂歌文庫に収蔵されている。その著書『私の見た明治文壇』に「新聞に大小の差別あると共に其の記者の閲歴、性行、風俗等にも相違があった。（中略）小新聞記者には戯作者、狂言作者又は俳人歌人といふ風の軟文学者が多かった」と記す。

「蟹のや印」(31)『門司陳書會書目』(Ⅱ―展―一―(一〇二))
「蟹のや印(小)」(15)『うとふの俳』(Ⅶ―二―F―一―八)



宮崎三昧（一八五九—一九一九）

明治大正時代の小説家。安政六年（一八五九）江戸下谷御徒町の儒者の家に生まれる。本名は璋藏。号は三昧道人。漢学を芳野金陵の塾に修め、茗溪学校を経て東京師範学校を卒業。明治十三年（一八八〇）『東京日日新聞』に入社。以後、『やまと新聞』『東京電報』『大阪毎日新聞』『大阪朝日新聞』と転じて、主に文芸欄を担当した。明治二十三年（一八九〇）

『東京朝日新聞』に入社。明治二十年代は歴史小説を中心とした作家として活躍する。軟文学書の収集・翻刻でも知られ、明治二十七年（一八九四）『珍書百種』を刊行している。幸田露伴・芳賀矢一・上田万年・尾崎紅葉・饗庭篁村らと『袖珍名著文庫』の校訂にも携わり、晩年には江戸文学の校訂翻刻に努めた。明治三十九年（一九〇六）腸チフスを患い文壇を遠ざかる。大正八年（一九一九）没。最晩年には特に愛好する数十巻を残して膨大な蔵書を悉く売却したという。



「游戯廬」（32）

『役者五雜組』（IX 一六—B—一〇—二二）

* 『からいとやうし』（三—F—あ—一—二）

森島中良（一七五四―一八一〇）

江戸時代後期の蘭学者・戯作者。宝暦四年（一七五四）江戸築地に生まれる。本姓は森島、桂川氏。中原とも称す。名は中良。幼名は友吉。字は虞臣。通称は万蔵、次郎、甫察、甫斎。号は桂林、森羅万象、森羅子、源平藤橘、万象亭、天竺老人、二世風来山人、築地善好、月池老人、下界隠士、竹杖翁、竹杖為軽など。幕府医官桂川甫三の次男。兄甫周に蘭学を学び、平賀源内門下の蘭学者として多くの著作がある。寛政四年（一七九二）から同九年まで通詞石井庄助と共に磐城白河藩主松平定信に仕えた。源内没後は芝全交の門に入り、洒落本、滑稽本、黄表紙、読本、狂歌等に多彩な活動をした。江戸十八大通の一人で、数寄風流の生涯を送った。文化七年（一八一〇）没。墓は江戸芝二本榎上行寺（昭和三十七年神奈川県伊勢原市に移転）。一説に宝暦六年生まれ、また、文化五年没の諸説あり。



「中良文庫」(58)

『古今和歌集』(VII-21K-14-1)

「卅」[象] (絵) (14)

『古今和歌集』(VII-21K-14-1)

森林太郎（一八六二—一九二二）

明治・大正時代の小説家。陸軍軍医。文久二年（一八六二）石見国津和野に生まれる。名は林太郎。諱は高湛。号は鴈外、鴈外漁史、観潮楼主人、千朶山房主人など。父森静泰は津和野藩主亀井家の典医であった。藩校養老館では秀才を謳われる。明治五年（一八七二）上京し、第一大学区医学校（のちの東大医学部）に入学、明治十四年（一八八一）最年少で卒業、軍医に任官した。明治四十年（一九〇七）陸軍軍医総監。要職を歴任する傍ら、小説・戯曲・翻訳・評論などにも目覚ましい活躍をした。最初の史伝小説『渋江抽斎』は、大正五年（一九一六）に『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』に連載された。大正六年（一九一七）帝室博物館長兼図書頭、帝国美術院長。大正十一年（一九二二）没。墓は東京向島の興福寺（関東大震災の後、三鷹の禅林寺に移された）。和漢洋の多方面にわたる蔵書六千余部は大正十五年（一九二六）に東京帝国大学に寄贈された。千駄木の観潮楼跡地に建てられた文京区立森鴈外記念館には自筆本が収蔵されている。



〔進木廼舎〕（33）

『帝王編年記』（X五B一〇四八）

笠亭仙果（一八〇四—一八六八）

江戸時代後期の戯作者。文化元年（一八〇四）尾張熱田の質商橋屋弥右衛門の男に生まれる。高橋氏。名は政房、広道。幼名は亀三郎。字は子由。通称は橋屋弥太郎。号は桃の舎、合一堂、古今堂、倉鼠松蘿居士、轍斎、招祿（松緑・貂祿）翁、狗々山人、四世浅草庵、笠亭仙果、柳々子、柳亭種秀、二世柳亭種彦など。熱田の神官磯部政春に手跡と素読を受ける。国学を鈴木胤に、画を森高雅に、和歌を高松公祐に学ぶ。名古屋の蔵書家平出順益らと親交があった。文政十二年（一八二九）柳亭種彦に入門。また、黒川春村の狂歌の門弟でもある。弘化二年（一八四五）父の放蕩で家業を失い、以後は江戸で戯作に専念する。慶応四年（一八六八）没。墓は東京都墨田区東駒形東盛（桃青）寺、また名古屋市熱田区白鳥の成福寺。蔵書は生前にほぼ散逸した。

「古のぬしせんくわ」（25）

『歌舞伎事始』（IX-16-B-1-015）

「高橋蔵書」（44） 『歌舞伎事始』（IX-16-B-1-015）

* 『張込集』（三T-M-a-15）（七）





渡辺霞亭（一八六四—一九二六）明治大正時代の小説家・劇評家・新聞記者。元治元年（一八六四）尾張国名古屋の藩家老の家に生まれる。本名は勝。号は霞亭、碧瑠璃園、緑園生、黒法師、朝霞隠士、春帆楼主人など。早くから文才があり、明治十四年（一八八一）好生館を中退して『岐阜日々新報』に入社。その後『金城新報』、明治二十年（一八八七）の上京、『燈新聞』さらに『東京朝日新聞』等を経て、明治二十三年（一八九〇）から長く『大阪朝日新聞』の記者を勤める。明治四十三年（一九一〇）社会課長に就任、大正八年（一九一九）退社。新聞・雑誌に歴史小説を多数発表して人気を博す。また、西村天因と雑誌『なにはがた』を創刊、京阪文学の振興に寄与して関西文壇に重きをなした。書画・骨董に一家言あり、江戸期板本の蒐集に努めた。大正十五年（一九二六）没。名古屋平和公園の守綱寺に葬られる。浮世草子、洒落本、咄本、古浄瑠璃、歌舞伎関係などを中心とする蔵書の大半は東京大学総合図書館に霞亭文庫として収蔵される。昭和二年（一九二七）にも売立があり蔵書の多くが入札に付せられた。

- 『霞亭文庫』（49）
- 『断手本忠臣蔵』（VII-11-F1e-5）
- 『柳巷訛言』（VII-11-F1e-5）
- * 『十寸見要集』（VII-11-J1a-4）
- 『宮蘭鸚鵡石』（VII-11-J1a-6）
- 『元禄二刊武鑑』（XII-31-D1d-147）
- 『重井筒』ほか（三-F1a-ほ1-1-1）
- 『曾我扇八景』（三-F1a-ほ1-1-4）
- * 『我おもしろ』（VII-11-M1-3）
- 『曾我扇八景』（三-F1a-ほ1-1-4）

「渡辺蔵書」（25）